

阪西紀子の社会史

1 ヨーロッパの古層へ

阪西紀子が生涯をかけて追及した研究テーマを一言で言えば、中世北欧社会史である。西スカンディナヴィアと呼ばれるノルウェーとアイスランドに残された古アイスランド語文献を根本史料とし、九世紀から一三世紀に至る当該地域の共同体のあり方を、とりわけ独特の社会秩序意識とその維持機能に注目しながら明らかにした。この点は、デビュー論文である「中世アイスランドの私有教会制度」（一九九三年）から最後の論考となつた「『ストゥルルンガ・サガ』における教会堂」（二〇一一年）まで一貫している。以下、阪西の成果の特徴を指摘しておきたい。

阪西社会史の第一の特徴は、徹底的に史料に立脚した議論を行うことである。西洋史という学問分野には様々なアプローチの仕方があり、場合によつては、現地の研究のエッセンスをまとめることで成果とすることも少なくなかつた。しかし阪西のいずれの論考も、手がかりとなる研究論文の問題点を指摘し、その問題点となる

箇所に関連する証言を徹底して収集し、その上で史料から言える範囲の結論を提起する、という手続きをとつてゐる。歴史学としては最もオーソドックスな論証作法であるが、いふほど簡単ではない。それは対象となる史料をまずは隅から隅まで読み、その証言を前後の文脈に即して意味を確定し、他の史料証言との間に矛盾なく位置づける必要があるからである。結果として、脱稿までに相当の時間が要求される。「中世アイスランドにおける男女関係」では『大物グズムンドルのサガ』を、「『ストゥルルンガ・サガ』における教会堂」では『ストゥルルンガ・サガ』の関連記述をしらみ潰しにし、その他の論文でも貧者、紛争解決、集会などの場面を同時代記述から適切かつ広範囲に抜き出している。阪西は徹底した史料主義、もつと言えば、史料をして語らしめるという、下からの社会史を実践していた。

それに加えて指摘すべきは、阪西が用いた史料は、分析する時代と同時代に作成された、証言能力の高い史料という点である。アイスランド研究の盛んな欧米も含めて、従来の研究は、「アイスランド人のサガ」と呼ばれる、一〇世紀頃の出来事を一三世紀に書き記したテキストに関心が集中してきた。『エギルのサガ』や『ニヤールのサガ』のように、この類型のサガが文学的には最も豊かな内容を持つことは議論の余地がないため、中世アイスランド研究でそれらのテキスト分析に多くのエネルギーが割かれてきたこと自体は当然である。日本においても山室静、谷口幸男、早野勝巳、菅原邦城らが翻訳紹介してきた作品の多くは「アイスランド人のサガ」であった⁽¹⁾。それに対し阪西は、『ヘイムスクリングラ』、『ストゥルルンガ・サガ』、「司教のサガ」といった、アイスランドの一三世紀を証言するサガを用い、さらにはそれらの翻訳を用意することで、同時代史料の利用という歴史学の鉄則を日本のサガ研究に定着させた。

第二に、キリスト教を相対化しうる日本人という立場から「キリスト教化されたアイスランド」を見てゐる

ことである。こうした阪西の見方の背後には、自身が様々な宗教を飲み込んだ日本人であるという阪西の自負がある。キリスト教化された社会を前提としている、もう少し踏み込んで言えば、「異教からキリスト教へ」にみられるように、キリスト教道德やキリスト教化プロセスをあるべき社会や歴史として当然視している西欧社会の偏見から自由であるところに、自分のメリットがあるとする。とりわけ阪西が関心を持っていたのは、他のヨーロッパ地域に比べてゲルマン信仰が根強く残っていたアイスランド社会において、どのようにキリスト教化が進んだのかという点である。その際、キリスト教化をるべき終着点とはせず、ゲルマン古層を残すアイスランド社会に導入されたキリスト教がどのように現地化したのか、という点に注目をしていた。これは、近年のポストコロニアルな宗教史においては前提とされる視点であるが、阪西の時代には、少なくとも中世史では必ずしも共有されていなかつた見方である。阪西は、非キリスト教的な環境で生まれ育つたという特性を生かして、その点にいち早く気づいていたし、留学経験で記すように、キリスト教が社会に埋め込まれているデンマークへの留学を通じてその見方を強く意識した。その結果として、阪西の論考はいずれも、キリスト教的な作法がアイスランドに根付くことをアイスランド社会の完成とはみなさず、ゲルマン慣習がキリスト教社会になつてもなおも生き続けていることがアイスランドの特徴であるとすら喝破している。

このような態度は、阪西の中世アイスランド観全体を規定している。阪西が、中世アイスランドの特性を検討する上で取り上げた私有教会、フェーデ、集会、婚姻は、聖職者らがまとめた規範史料ではあたかも他のヨーロッパ諸国と同様にキリスト教の倫理コードに基づいているように見えるが、同時代証言であるサガを仔細に検討すると、ヴァイキング時代以来の世界観、自力救済、所有観念を担保するゲルマン的価値観がなおもまだ生き続けており、それが王なきアイスランド社会の共同体を支える特徴として現れている点を明らかにして

いる。一九八〇年代は、前近代社会への文化人類学的手法の導入を通じて、キリスト教社会のさらに底流を流れれる「ヨーロッパの古層」論が盛んになつた時代でもあるが、阪西の論考は、そうした古層を史料に基づいて論証したことができる。

第三に、アイスランドやノルウェーという辺境の古層を検討しながら、ヨーロッパ社会の多様性に关心を向けていることである。もともと阪西の所属した一橋大学はドイツ史の影響が圧倒的に強い場であった。カール・ランプレヒトの下で学んだ三浦新七以来、上原専祿、増田四郎、阿部謹也、山田欣吾など、史学史上に残る中世学者らのメインフィールドはドイツであった⁽²⁾。一橋に限らず、堀米庸三の東京大学もそうである。徐々にフランスやイタリアの研究も学界を席巻しつつあつたにせよ、ドイツの事例研究を通じてヨーロッパを論じてきたのが一九八〇年代頃までの日本の西洋中世研究である。しかしそのような空気の中で阪西は、あえて、辺境の辺境とも言えるアイスランドを研究対象として選んだ。それは、恩師阿部が独訳されたアーロン・グレーヴィチの読書を通じて古ゲルマン社会を保存する北欧を「発見した」こともあるだろうが、阪西自身が、日本という辺境から更にアイスランドという辺境を通じて、我々が大国の色眼鏡を通じて無批判にヨーロッパと呼んでいる多様性の集合体を捉え直すという意図があつたことも指摘しておきたい。阪西自身も気づいているように、アイスランドはゲルマン社会の古い姿が見えかくれしており、そうであるならば、アイスランドを研究することはヨーロッパの古層を知ることでもあること、もう一步踏み込めば、キリスト教と接触することで、その古層がどのように変化をしてきたのかを観察しうる実験場であることに気づいていた。

このように、阪西の視線は常に比較が意識されている。私有教会を論じた最初の論文が掲載された媒体が『比較法史研究』であつたことが象徴するように、阪西の研究は、他の地域の事例研究で定説とされていたこ

とを、辺境の事例を提示することで相対化する。それは単にみんな違つてみんない、であるとか、アイスランドという辺境を扱っているのだから特殊な事例だという価値相対主義に基づく理解ではなく、ヨーロッパ社会をただキリスト教社会として理解してきたことへの反省を促す作業でもあり、その上で、ヨーロッパ社会の複数性や多様性を論証し、ヨーロッパとは何か、という、それこそ増田四郎や阿部謹也が明らかにしようとした根本問題へとつながる問い合わせでもある。阪西の問題意識と論文を通じた実践は、キリスト教由来の価値基準を過去に投影しがちなヨーロッパ研究のあり方に再考を促すものでもあった。それは未開で野蛮なゲルマン精神の再発見ではなく、長い歴史を持つヨーロッパ社会の重なりと豊かさを解放する蟻の一穴となりうる成果であった。

2 阿部謹也の磁場

阪西の仕事を理解するためには、一つの時代を振り返らなければならない。社会史の時代、とでもいうべき一九八〇年代である。

社会史という言葉は戦前から存在したが、人々の日常生活から歴史社会を見直し、特定の時空間を特徴づけるという作法での社会史が日本で前面に出てきたのは戦後である。二宮宏之はある報告の中で、いわゆる六八年を経た一九六〇年代末以降いわゆる戦後歴史学の閉塞状況を超えて新たな方向の摸索の結果出てくる「問い合わせの歴史学」こそが、社会史であるとする。川田順三「無文字社会の歴史」（一九七六年、『思想』連載は七年から七四年）、阿部謹也「ハーメルンの笛吹き男」（一九七四年、『思想』掲載は七二年）、中井信彦「歴史学的方法の基準」（一九七三年）、鹿野政直「大正デモクラシーの底流」（一九七三年）、安丸良夫「日本の近代化と民衆

思想」（一九七四年）、網野善彦『蒙古襲来』（一九七四年）を挙げ、「社会史は、これらの動きのなかから紡ぎ出されてくる」と論じた⁽³⁾。その上で二宮は、このような潮流に見える特徴を、①普遍性からローカル・ノリツジヘ、②抽象的概念世界から日常的生活世界へ、③ヨーロッパ近代モデルの相対化へ、という三点にまとめた。こうした日本の試みと世界の潮流とを引き合わせる場となつたのが、『思想』の一九七九年九月号の特集「社会史」ではなかつただろうか。

阿部謹也がこのようなかで台頭してきたことはよく知られている。というよりも、阿部の仕事こそが、日本の歴史学の中に「社会史」という分野を置き直したと言つて良い。幼少の一時期を修道院で過ごし、上原専祿の薰陶を受け、増田四郎の指導を受けた阿部は、ヘルマン・ハインペルの歴史認識を発見し、ゲッティンゲンへの留学を経て、ドイツ中世とりわけヨーロッパ全体にネットワークを広げた中世後期のドイツ騎士修道会に関するモノグラフを完成させた⁽⁴⁾。ミクロな一地域の事例分析を行うことでヨーロッパ全体の特徴を叙述するという『ドイツ中世後期の世界』は、阿部のその後の研究の足腰となつた。他方で、すでに確認したように一九七二年に『思想』に掲載された「ハーメルンの笛吹き男」は、日本の社会史アームの火付け役となつた。ドイツ騎士修道会を生み出すドイツの東方植民運動を背景に生み出された笛吹き男伝説は、ただの伝説ではなく、西洋中世世界の特徴を浮かび上がらせる鍵として立ち現れた。フランスのアーネル派やイギリスの社会人類学的アプローチが輸入される以前にすでに形作られていた阿部の社会史は、二宮が指摘した社会史の三つの特徴を備えつつ、自分自身を掘り起こし、自己と他者との関係から社会とは何かを考えるという自律的かつ個人的な作業でもあつた。

こうした阿部の社会史を支えたもう一つの場は、一橋大学社会学部という磁場であつた⁽⁵⁾。戦後、上原専

祿の主導で建てられた社会学部は、社会学という特定ディシプリンを追求する学部ではなく、多様なディシプリンを通じて社会なるものを明らかにしようとする場であった。社会学研究科内に「社会史」講座が設置されたのは一九六三年であり、一九八〇年の再編によつて八つの大講座が設置され、社会学部の基本構造が決定した。すでに述べたように、阿部自身もこの社会学部で学び、そこで得られた種を「北の街」小樽で大切に育て、東京経済大学を経て一九七九年に母校に呼び戻されたのち、研究者を養成する一橋大学という場で彼自身の研究活動それ自体が社会史と同義となつた、と言えるかもしれない。阿部と前後して、三谷孝（中国近現代史）、油井大三郎（アメリカ史）、土肥恒之（ロシア史）も着任した。それに加えて一橋の歴史学を豊かなものとしていたのは、講座や学部を超えた「歴史学共同研究室」の存在である。藤原彰（日本近代史）、佐々木潤之介（日本近世史）、安丸良夫（日本思想史）、良知力（社会思想史）ら社会学部のスタッフだけではなく、経済学部の永原慶二（日本中世史）、渡辺金一（ビザンツ史）、山田欣吾（中世ドイツ史）らとの日常的な交流は、網野善彦・石井進・樺山紘一との対話記録『中世の風景』や川田順三・二宮宏之・良知力との同人誌『社会史研究』で見られる大学や分野を超えた社会史の追求と相まって⁽⁶⁾、西洋中世を舞台とした阿部社会史の裾野を広げ、のちの世間論へとつながる見方を涵養したように思われる。

一九八一年に入学した阪西が教育を受けた一橋大学の歴史学は、まさに盛りにあつたと言つて良い。阪西は、いわゆるアナール派の社会史にも相応の関心を寄せていたが、彼女の研究手法は、むしろ先入見なく史料の読み解を通じて「社会」を発見する、一橋ならではの手作りの作法であった。その点において、阪西は紛れもなく阿部の教え子であり、一橋社会史の一人であつた。阪西は、本人の言葉を借りれば阿部謹也と「出会つてしまつた」から西洋中世研究を志し、周囲を見て「どうせ苦労するなら好きなことをやろう」と大学院へ進学した

わけだが⁽⁷⁾、北欧との出会いは、学部時代に読んだ熊野聰『北の農民ヴァイキング』（一九八三年）にあると個人的には聞いている⁽⁸⁾。平凡社の三浦徹（お茶の水女子大学名譽教授）が編集を務めた本書もまた阿部が火付け役となつた社会史ブームの産物の一つであることを思えば、阪西は幾重にも阿部の掌にいたのだと言える。卒業論文は九世紀のアイスランド植民地執筆した阪西は、大学院では時代を下げて中世アイスランドへと転向し、阿部から自分のところにいても仕方がないと留学を促され、中世アイスランド写本研究の一大拠点である、デンマークのコペンハーゲン大学附属アーレニ・マグヌソン研究所に国費留学を果たした。その成果として生まれたのが雄編『中世アイスランドの私有教会制度』である。史料研究、研究史の批判的検討、関連する記述の悉皆調査、抑制の利いた結論という、阪西の全ての論考に通じる要素がすでに揃っている。そして最後の論文となつた「『ストゥルルンガ・サガ』における教会堂」が、阪西が私訳を用意していた『ストゥルルンガ・サガ』を用いて、まさにデビュー論文を再検証し補足する内容であつたことは、偶然とはいえ、阪西の関心の根がどこにあるのかを示しているように思われる。

3 阪西さんとの思い出

最後に、制度外の学生として阪西の教えを受けたものの思い出を記す。ここでは阪西さん、と呼ぶことをお許しいただきたい。

私が阪西さんに初めてお会いしたのは私が一九九七年に修士課程へ進学した後である。大学院でヴァイキングの研究をやることを決めたのはいいが、研究室周辺に先達がいるはずもなく、文献収集にせよ必要な語学にせよ、全くの手探りであつた。デンマーク語は早稲田大学の村井誠人先生の授業に出席し、古アイスランド語

については、当時東大大学院言語学研究室の博士課程に在籍していた入江浩司さん（現金沢大学教授）に千駄木のカフェ・ド・クリエで集中的に教授していただいたものの、継続的にテキストを読む環境にはなかつた。まさにその一九九七年に一橋大学助教授として阪西先生が着任されたことを知り、一面識もなかつたにもかかわらず、今後どのように北欧史を勉強すべきかという相談の手紙を差しあげた。阪西先生からはすぐにお返事を頂戴し、二つの読書会への参加を促してくださいました。

一つは、本郷三丁目駅のそばにある名曲喫茶麦で隔週土曜日の午後に開催されていた北欧語読書会である。主催者は当時日白大学教授であった横山民司先生である。デンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語、アイスランド語を毎回四時間ほどかけて輪読する会で、メンバーは入れ替わりつつも六、七人が集まつていた。私が参加した時は、阪西先生がデンマーク語を担当していた。テキストは考古学の歴史を扱つた小著であった⁽⁹⁾。半年ほどして読み終えると、今度は私がデンマーク語の担当となつた。テキストは、私が選んだわけではないが、アンデルセン『即興詩人』の原著であった。一九世紀の文学作品なので、用いられている単語も表現も私がそれまで接してきた文章に比べると格段に難しく、語学習得の初期段階にあつた私は往生したことだけはよく覚えている。ただ、読書会が終わつた後には必ず近くの飲み屋で一杯があり、ここで阪西先生からも公私にわたるお話を伺うことができたのは楽しかつた。

もう一つは、月一回程度行われていた古アイスランド語の読書会である。阪西さんの他に、大塚光子さん、西田都子さん、伊藤盡さん、故荒川明久さんらがいらっしゃつた。私が参加した時は『ヘイムスクリングラ』に所収された「聖オーラーヴ王のサガ」を読んでいた。場所は、西田先生のご自宅であつたり阪西さんの研究室であつたりした。阪西さんの研究室に集まつた時は、「この棚の本は阿部謹也先生が置いていかれたもので

す」と説明してくれた。私などは、入江さんに文法を手解きしてもらつただけで参加したので、当時は手も足も出ず、最初の読書会の場では、阪西さんに「もっと辞書を引いて予習をしてきなさい」と厳しく言われたことを思い出す。

私は博士課程の二年目に日本学術振興会特別研究員の研究委託制度を用いて阪西さんと同じコペンハーゲン大学に留学をしたので、ふたつの読書会に参加したのは二年程度であった。留学から帰国後も阪西さんとは抜き刷りと年賀状のやりとりは続けていたものの、二〇〇七年には名古屋大学に研究員として採用されたこと、二〇一一年には池袋の現任校に着任するも生活の基盤が神戸になつたこともあり、なかなかお会いする機会はなかつた。実際にお顔を拝したのは、バルト・スカンディナヴィア研究会で彼女が報告した時くらいであり、二〇一六年五月に一橋大学で開催された日本西洋史学会での立ち話が最後となつた。二〇一八年八月には、『ヴァインランド・サガ』の作者幸村誠さんやアイスランドの研究仲間らとともにレイキャヴィークを訪れ、阪西さんが毎回参加させていた国際サガ学会でも報告を果たしたが、そこに彼女の姿を見ることはなかつた。

本書にまとめられた阪西さんの仕事は、流行の議論とは距離をおいた、ある意味愚直なまでに史料第一主義であるがゆえに、ともすれば時流に流されがちな私たち後進に対する戒めとして永続的に参照され続けるだろう。中世北欧とサガの魅力と可能性を高い水準で分析するのみならず、それを通じてキリスト教中心主義的に記述されてきたヨーロッパ史を見直す素材として、私たちに作品を残してくれた北欧中世学者にして社会史家の阪西紀子に感謝したい。阪西さんが西洋中世と自分をつなげようと「自分の中に歴史を読む」という恩師阿部の言葉に惹かれていたことをお別れ会の弔辞で読み上げたように⁽¹⁰⁾、本書に収められた歴史世界の中に阪西

さんを読み、その阪西さんが残した問題意識に向き合うことで、彼女の社会史は引き継がれていくだろう。そう思う。

二〇一二年四月

小澤実

〔註〕

- (1) 小澤実「かくて円環は閉じる—谷口幸男の翻訳活動と戦後日本の北欧中世研究」『立教大学日本学研究所年報』二〇号、二〇一二年、一三一～二六頁を参照。
- (2) 一橋大学の史学の歩みは、増淵龍夫・阿部謹也「歴史学」一橋大学学園史編集委員会『一橋大学学問史』一橋大学、一九八二年、九、七七～九八七頁。西洋史はさしあたり、山田欣吾「西洋史」「一橋大学学問史』九八九～一〇〇五頁並びに土肥恒之『西洋史学の先駆者たち』中公叢書、二〇一二年を参照。
- (3) 二宮宏之「戦後歴史学と社会史」歴史学研究会編『戦後歴史学再考』「国民史」を超えて』青木書店、一〇〇〇年、一三二～一三四頁。
- (4) 阿部謹也「北の街にて——ある歴史家の原点」洋泉社、一〇〇六年、同『阿部謹也自伝』新潮社、二〇〇五年。
- (5) 本段落の基礎情報は、秋山晋吾さん（一橋大学）にご教示いただいた。
- (6) 「中世の風景」上下、中公新書、一九八一年。『社会史研究』は日本エディタースクール出版部から一九八二年から八八年にかけて第八号まで刊行された同人誌。一九八六年には『日本の社会史』全八巻が、一九八九年から九一年にかけては『シリーズ世界史への問い』全一〇巻が岩波書店から刊行された。いずれも社会史研究の隆盛を受けての、日本独自の「問い合わせの歴史学」と理解される。
- (7) 「研究室訪問・阿部謹也先生追悼編」(https://www.hit-u.ac.jp/hq-mag/chat_in_the_dan/pdf/hq14.pdf)